

「良い」

マルコの福音書 9:42~50

はじめに

今日の箇所には「良い」という言葉が5回使われていますが…誤解しないでください。それは人の価値基準ではなく、神の基準、神の目から見て「良い」ということです。また今日の内容も非常に誤解されやすいものとなっています。何しろ人を海に投げ込むとか手足を切り捨てる、目をえぐり出すというような過激な表現で語られているからです。キリスト教は切り捨て教か…なんて言われそうな箇所です。そしてゲヘナ、一般的には地獄と呼ばれる永遠の滅びについても何度も語られており、ただ読むだけでは恐怖感が先行してしまい、一体何が「良い」のかわからないものとなっています。ですから今日も聖書の原語であるヘブル語の視点から、これを深く探っていきたいと思います。聖霊の助けがありますように。

1. つまずかせる

マルコの福音書【新改訳 2017】

9:42 また、わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、むしろ、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよいのです。

9:43 もし、あなたの手があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろっていて、ゲヘナに、その消えない火の中に落ちるより、片手でいのちに入るほうがよいのです。

9:44 【本節欠如】

9:45 もし、あなたの足があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろっていてゲヘナに投げ込まれるより、片足でいのちに入るほうがよいのです。

9:46 【本節欠如】

9:47 もし、あなたの目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出さなさい。両目がそろっていてゲヘナに投げ込まれるより、片目で神の国に入るほうがよいのです。

「つまずかせる」つまずく、この言葉の持つ日本語の概念とヘブル語の持つそれとは大きく違います。日本語の「つまずく」で大げがをすることはほとんどありませんが、ヘブル語の「つまずく」と訳されるカーシャル(כַּשַׁל)という言葉は本来、なんと死ぬこと、滅びを意味する言葉なのです。

レビ記【新改訳 2017】

26:14 しかし、もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらすべての命令を行わないなら、

26:15 また、わたしの掟を拒み、あなたがた自身がわたしの定めを嫌って退け、わたしのすべての命令を行わず、わたしの契約を破るなら、

26:16 わたしもあなたがたに次のことを行う。わたしはあなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる。あなたがたは種を蒔いても無駄である。あなたがたの敵がそれを食べる。

26:36 あなたがたのうちで生き残る者にも、敵の国にいる間、彼らの心の中に臆病を送り込む。吹き散らされる木の葉の音にさえ彼らは追い立てられ、剣から逃れる者のように逃げ、追いかける者もないのに倒れる。

26:37 追いかける者もないのに、剣から逃れるかのように折り重なってつまずき倒れる。あなたがたは敵の前に立つこともできない。

26:38 あなたがたは国々の間で滅び、あなたがたの敵の地はあなたがたを食い尽くす。

26:39 あなたがたのうちの生き残る者も、敵の地で自分の咎のために朽ち果てる。さらに先祖の咎のために朽ち果てる。

これは神がイスラエルの民に対して語られた警告です。そして実際にこの民は神に聞き従わなかったためにその歴史においてカーシャル「つまずき倒れ」、そして敵である「国々の間で滅び」するという結果になりました。しかし、ここで注意していただきたいのは、彼らを「つまずき倒れ」させたのは、彼らの敵ではないということです。彼らは「追いかける者もないのに倒れる。」ともあり、実に彼らがつまずいたのは、彼らが神に「聞き従わず、これらすべての命令を行わない」、また神の「定めを嫌って退け…すべての命令を行わず…契約を破る」という、彼ら自身の犯した罪のためなのです。つまり「つまずく」とは本来、つまずいたその人自身に問題がある、いわゆる自業自得という意味であると考えられます。そもそも道端の石につまずいて、誰がここに石を置いたのかと怒るといふ発想自体愚かですし、ましてや「この石ころめ！」と言って石そのものに怒るなどということはありませんよね。よく見て歩いていない自分が悪かったということです。このように、人を「つまずかせる者」とは、神でも悪魔でもなく、自分自身です。命じられるにせよ、騙されるにせよ、結果的に人は自分が自分で犯した罪によって滅びるのです。

そしてここでイエシュアは一つの不思議なたとえを話しておられます。

「大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよい…」

という、これは一体どういう意味でしょうか。実際にこんなことをすればその人は溺れ死んでしまうでしょう。この「大きな石臼」のことをペラハ・レヘヴ(פְּלַח־רֶבֶב)、直訳では「軍馬の石臼」というのですが、この言葉は旧約聖書で一度だけ使われています。

士師記【新改訳 2017】

9:53 そのとき、一人の女がアビメレクの頭にひき臼の上石を投げつけて、彼の頭蓋骨を砕いた。

このように、アビメレクという王の「頭蓋骨を砕いた」道具としてペラハ・レヘヴが用いられています。またイエシュアはこれを「首に結び付けられて…」と言われましたが、ここに使われているターラー(תָּלָה)は本来、「罪人を木に掛けて処刑する(創世記 40:19)」という意味を持った言葉なのです。これらの言葉の持つその本来の意味から、「頭蓋骨を砕かれ、木にかけられた一人の王」の姿が浮かび上がってきます。それはもちろん「頭蓋骨」という意味の場所、ゴルゴタで十字架にかけられ、死なれた、砕かれた、イスラエルの真の王なるイエシュアです。つまりイエシュアはイスラエルの「つまずき」すなわち彼ら自身の罪のために彼らが滅ぶよりも、その身代わりにご自分が十字架にかかって死ぬ方が「よい」と言っておられるのだと考えられ、またそのようになることを神のご計画として指し示しておられるのだと

考えられます。このように、「この小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよい」というイエシュアの御言葉は、イスラエルの罪の身代わりとして、その罪の贖いとして十字架にかかられて死なれるイエシュアの姿が指し示されたたとえであると考えられます。

2. 手、足、目

そのように解釈するならば、次の「もし~なら」という形で繰り返される三つのたとえもまた同様の意味を持っていると考えられ、「切り捨てなさい」、「めぐり出しなさい」と言われている「手」「足」「目」もまたイエシュアを指し示していると考えられます。なぜなら、どのような「つまずき」すなわちどのような罪であれ、イエシュアの十字架の死による贖い以外によってそれが赦されることはないからです。それではここに示されている「手」「足」「目」にはそれぞれどのような意味がこめられているのでしょうか。

①手

ヘブル語で「手」のことをヤード(יָד)といいます。この言葉は本来、永遠に生きる、永遠のいのちを指し示す言葉であると考えられます。

創世記【新改訳 2017】

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

このように、ヤードとは本来、エデンの園にあった「いのちの木から…食べ、永遠に生きること」を指し示す言葉であると考えられます。「手」を切り捨てる、すなわちイエシュアの十字架の死によって、人は永遠のいのちを得るのです。

②足

また「足」レゲル(לֶגֶל)は本来、立ち返る、戻ることの意味する言葉であると言えます。

創世記【新改訳 2017】

8:8 またノアは、水が地の面から引いたかどうかを見ようと、鳩を彼のもとから放った。

8:9 鳩は、その足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を伸ばして鳩を捕らえ、自分がいる箱舟に入れた。

これはかつて地上のすべてを飲みこんだ大洪水の出来事です。ノアとその箱舟に入ったものたちだけがその滅びを免れ、生き残りました。その大洪水の終わりに、ノアは鳩を飛ばしましたが、鳩は「足を休める」ために、再び彼のもとに「帰って来た」ことが記されており、レゲルという言葉には本来、「安息を得るために帰る」というような意味合いがあると考えられます。イエシュアを「切り捨てる」、すなわちイエシュアの十字架の死によって、人は滅びを免れ、神のみもとに立ち返り、やがて永遠の「いのち」、「神の国に入る」という安息を得ることができるのです。それが「足…を切り捨てなさい。」と言われたイエシュアの御言葉の意味であると考えられます。

③目

そして「目」アイン(אֵין)についてですが、これは創世記 3:5 にその最初の言及があります。

創世記【新改訳 2017】

3:4 すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。

3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった…。」

これはエデンの園でエバをだました蛇の言葉ですが、後に神も同様のことを言っておられますので、「目」アインとは本来「神のようになって善悪を知る者となる」こと、すなわち神の教えとさだめ、律法が心に刻まれることを指し示す言葉であると考えられます。先に述べたように、罪とは神の御言葉に逆らい、聞き従わないことであり、また神以外のものに聞き従うことなのです。神がエバを咎められたのは蛇すなわちサタン、悪魔に聞き従ったということに対してです。たしかに蛇はエバを誘惑し、彼女をだました。しかし彼女の手をつかんで無理やりに善悪の知識の木の実を取らせたわけでも、彼女の口に強引にそれを押し込んだわけでもありません。実際にエバが自分の手でこれをしたのです。ですから「善悪を知る者となること」自体が罪なのではありません。むしろ何が善で神に受け入れられ、また何が悪で神が忌み嫌われることなのかを知ることは、人にとって重要不可欠な知識です。実際にエバ、そしてアダムは自分たちが犯した罪、行ってしまったことが神の目に悪であるということを正しく理解し、それゆえに神を恐れました。ですからイエシュアの十字架の死によって罪が贖われた者はみな、神と同じ考え、同じ視点、同じ基準を持つ者となるということがこの「目…をえくり出しなさい。」というたとえには表わされているのだと考えられます。神に聞き従う者が「善悪を知る者となること」は重要です。神の御子イエシュアこそがまさにそのような御方なのです。

このように「いのちに入る」者、すなわち「神の国に入る」者はみな、ある意味で「片手、片足、片目」です。しかしそれはただ一つの手、ただ一つの足、ただ一つの目によって救われるということでもあり、それはつまりイエシュアの十字架の死による罪の贖いというただ一つ的手段、ただ一つの道、ただ一つの基準によって「神の国に入る」者となるということが表されているとも言えます。それがここに記されたイエシュアのたとえには、「よいのです」と言われた、神のお立てになった「よい」ご計画として表されているのだと考えられます。

3. ゲヘナ

マルコの福音書【新改訳 2017】

9:48 ゲヘナでは、彼らを食らうじ虫が尽きることがなく、火も消えることはありません。

実はこの箇所は【本節欠如】となっている 44 節と 46 節にも挿入される御言葉だそうです。注釈付きの聖書にはそれが明記されています。なぜ省かれているのかは不明ですが、千年王国、メシア王国とも呼ばれる「神の国」の完成を表す御言葉として、この一文は非常に重要です。私はこれを欠如などとせず、しっかり三度記すべきだと思います。なぜならこの御言葉は以下の預言を指し示すものだからです。

イザヤ書【新改訳 2017】

66:18 「わたしは彼らのわざと思いを知っている。わたしはすべての国々と種族を集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。

66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、ブル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのうわさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。

66:20 彼らはすべての国々から、あなたがたの同胞をみな【主】への贈り物として、馬、車、輿、らば、らくだに乘せて、わたしの聖なる山エルサレムに連れて来る——【主】は言われる——。それはちょうど、イスラエルの子らが穀物のささげ物をきよい器に入れて、【主】の宮に携えて来るのと同じである。

66:21 わたしは彼らの中からも、ある者を選んで祭司とし、レビ人とする——【主】は言われる。

66:22 わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、——【主】のことは——あなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く。

66:23 新月の祭りごとに、安息日ごとに、すべての肉なる者がわたしの前に来て礼拝する。——【主】は言われる——

66:24 彼らは出て行って、わたしに背いた者たちの屍を見る。そのうじ虫は死なず、その火も消えず、それはすべての肉なる者の嫌悪的となる。」

この預言の最後の一文が「ゲヘナでは、彼らを食らうじ虫が尽きることがなく、火も消えることはありません。」と言われたイエシュアの御言葉と重なります。イエシュアは明らかにこのイザヤの預言を意識して、これを指し示して語っておられると思われます。そしてその前には、このようにエルサレムに集められるイスラエルの民と、それを助け、ともに上って来る諸国の民、異邦人たちが彼らとともに祭司となり、ともにイスラエルの主の祭りを祝い、ともに仕えるようになるという「神の国」の姿が、神のご計画の完成がどのようなものであるかが詳細に記されているのです。イエシュアが指し示されたこのイザヤの預言には、神に選ばれ、集められる者たちの「神の国」と、「ゲヘナ」すなわち神に「背いた者たち」が入れられる「すべての肉なる者の嫌悪的」の様子が同じ箇所に対照的に描かれています。

4. 塩は良いもの

マルコの福音書【新改訳 2017】

9:49 人はみな、火によって塩気をつけられます。

9:50 塩は良いものです。しかし、塩に塩気がなくなったら、あなたがたは何によってそれに味をつけるでしょうか。あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしなさい。」

文脈からして、ここでイエシュアが言っておられる「火」とは、永遠に消えることのない「ゲヘナ」の火、神に背いた者にもたらされる、永遠の滅びです。つまり「人はみな、火によって塩気をつけられます」とは、「神に背いた人はみな、ゲヘナの火によって永遠に滅ぼされる」という意味であると考えられます。ですから「塩は良いものです」という御言葉もまた「滅びは良いもの」ということになります。こういう言い方をすると「滅びとは悪いものではないか」と思われるかもしれませんが、では神がご自分に背いた者たちを滅ぼすことは、悪いことなのでしょうか。滅ぼすことが悪なのではなく、滅ぼされるものが悪なのです。神に背くことが悪であり、その悪のゆえに人は滅ぼされるのです。私たちの社会正義でも犯罪者が罰せられることは正しいこと、「良いこと」ですよね。私たちはみな神の目には罪人、悪人で、滅びるべき者です。しかし神はその滅びを免れる者として私たちをお選びになりました。これを「救い」と言います。つまり滅びがあるからこそ「救い」があるのです。ですからイエシュアが言われた「塩に塩気がなくなったら、あなたがたは何によってそれに味をつけるでしょうか」とは、こういう意味だと捉えることができます。「滅びが滅びでないなら、あなたがたに救いはありません。」想像してみてください。強盗や人殺しが、捕まえられることも罰せられることもなく私たちの町にあふれていたら、あなたはきっと平和に暮らすことはできないでしょう。神は私たちが平和に、そして永遠に暮らせる世界を造ろうとしておられるのです。

このように、滅びとは永遠の平和「救い」が表されるために必要な「良いもの」なのです。やがて再びイエシュアが、ヘブル語でまさに「救い」という意味を持ったこの御方がこの地上に来られます。そして神に背く悪者どもを滅ぼし、これを永遠にゲヘナの火の中に閉じ込めて、永遠に滅ぼし、これを保ってくださいます。そして地上には神と神がお救いになった者たちの永遠の平和が訪れます。それが、神のご計画がこの「あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしなさい」という御言葉の中には表されていると考えられます。

今日取りあげた「良い」という言葉はヘブル語でトーヴ(טוֹב)といますが、本来この言葉には「光に目をとめる」「光と闇を分ける」という概念があります。

創世記【新改訳 2017】

- 1:1 はじめに神が天と地を創造された。
- 1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面のの上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。
- 1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。
- 1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。
- 1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

かつてこの地上は闇がすべてを覆っていました。そこに神は光を現わされました。これは宇宙と太陽、星の世界の話ではなく、この「地」の話です。そして神が「良しと見られた」、すなわち神がお選びになった者を闇の中から救い出すというご計画が表されたものなのです。そして「夕があり、朝があった」とあるように、やがてすべての闇は消え去り、すなわち滅ぼされ、光の世界への夜明け、永遠の平和という朝がこの地上に訪れるということなのです。神は聖書の最初にこれを「第一」のこととして記されました。「神

は光を良しと見られた。」神が見ておられるこの「良い」ご計画を、私たちもともに目をとめ、その実現に向かって、まさに目指して歩む者とならせていただきます。イエシュアの御名によって。